

201 イエス・キリスト、墓に葬られる

ヨハネによる福音書 19 : 31~37 イエスのわき腹を槍で突く

ヨハネによる福音書 19 : 38~42 墓に葬られる マタイ 27 : 57~61、マルコ 15 : 42~47、ルカ 23 : 50~56

聖書から見た過越祭と除酵祭、そしてイエス・キリストの磔刑

ニサンの月

第一の月の十四日の夕暮れが主の過越である。同じ月の十五日は主の除酵祭である。(レビ記23:5~8)

㊤聖書記述通りの図表示

十日	十一日	十二日	十三日	十四日	十五日	十六日	十七日	十八日	十九日	二十日	二十一日
夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼	夜 昼

10日:小羊を一匹用意する(出エジプト12:3)

●14日夕暮れ:小羊を屠り、その血を二本の柱と鴨居に塗る(出エジプト12:6~7)

15日夜:小羊の肉を火で焼き食べる(出エジプト12:8)
過越祭:主の過越し(出エジプト12:11、12)

十四日夕方

1	2	3	4	5	6	7
---	---	---	---	---	---	---

除酵祭:七日の間(十四日夕方から二十一日の夕方まで)
酵母を入れないパンを食べる(出エジプト12:15、12:18)

バビロン捕囚前の暦

マタイによる福音書
マルコによる福音書
ルカによる福音書

金	土(安息日)	日
夜 昼	夜 昼	夜 昼

緑:過越祭→ 最後の晩餐→ ● 除酵祭の第一日、過越の小羊を屠る日(マタイ26:17、マルコ14:12、ルカ22:7、8)

キリストの磔刑→ ● キリスト復活→ ●

▶イエスのわき腹を槍で突く (ヨハネによる福音書 19 : 31~37)

31 その日は (安息日の) 準備の日で、翌日は (聖なる過越祭と聖なる安息日が重なる) 特別の (=大いなる) 安息日であったので、ユダヤ人たちは、安息日に (呪われ汚れている) 遺体を十字架の上に残しておかないために、(死を早める方法として) 足を折って取り降ろすように、ピラトに願い出た。

→足を折って取り降ろすように急いだのは、3時ころの出来事で、安息日に入る夕方の6時頃までに数時間しか、時間が残されていなかったからである。

→過越祭は曜日には関係なく、月の満ち欠けで定められた (→ニサン月 15 日の満月の日)。

準備の日は、金曜日 (安息日の前日) である (マタイ 27 : 62、マルコ 15 : 42、ルカ 23 : 54)。

通常は、遺体をそのまま放置し、鳥葬等 (刑罰の一部) にする。しかし、この日 (→準備の日) は、翌日が安息日であり、しかも過越祭と重なる、特別の大いなる安息日であったため、遺体を放置しておくことは、絶対に容認できることではなかった。加えて、ユダヤ人たちは、十字架につけられた者の遺体は特に呪われ汚れており、そのまま放置すれば、エルサレムの町全体が汚れると考えた。また、彼らの律法では、遺体に触れた者は、過越祭を祝う前に「清めの儀式」を経なければならなかった (レビ記 14 : 4 他)。

罪のないイエスを十字架につけると言う最大の罪を犯しながら、ユダヤ人たちは儀式的な汚れにこだわっていた。

32 そこで、兵士たちが来て、イエスと一緒に十字架につけられた最初の男と、もう一人の男との足を折った。

→足 (脛:すね) を折ることで、一気に受刑者の体が下に沈み込み、肺呼吸が出来なくなり、死に至らした (→出血死、ショック死、窒息死)。

33 イエスのところに来てみると、(イエスは神に自分の命をお返しになり) 既に死んでおられたので、その足は折らなかった。

34 しかし、(疑い深い) 兵士の一人が槍でイエスのわき腹を刺した。すると、すぐ血と水とが流れ出た。
→血は聖餐式、水は洗礼(バプテスマ)を象徴(比喩的解釈)しているという考え方もある。

35 それを目撃した者(→ヨハネ)が証しており、その証しは真実である。その者(→ヨハネ)は、あなたがたにも信じさせるために、自分が真実を語っていることを知っている。

→(リビング・バイブル) この一部始終を、私(ヨハネ)は確かにこの目で見ました。それをありのままに、正確に報告しています。皆さんにも信じていただきたいからです。

36 これらのことが起こったのは、「その骨は一つも砕かれない」という聖書の言葉が実現するためであった。→メシア預言の成就

→出エジプト記 12:46

一匹の羊は一軒の家で食べ、肉の一部でも家から持ち出してはならない。また、その骨を折ってはならない。

→民数記 9:12

翌朝まで少しも残してはならない。いけにえの骨を折ってはならない。すべては過越祭の掟に従って行わねばならない。

→詩編 34:21

骨の一本も損なわれることのないように／彼を守ってください。

37 また、聖書の別の所に、「彼らは、自分たちの突き刺した者を見る」とも書いてある。

→カリヤ書 12:10

わたしはダビデの家とエルサレムの住民に、憐れみと祈りの霊を注ぐ。彼らは、彼ら自らが刺し貫いた者であるわたしを見つめ、独り子を失ったように嘆き、初子の死を悲しむように悲しむ。

▶**墓に葬られる**(ヨハネによる福音書 19:38~42) → **午後6時**(イエスの死:午後3時)

38 その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのこと(→イエスの弟子)を隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、(夕方になって→マタイ 27:57)イエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。

→ルカによる福音書 23:54 その日は準備の日であり、安息日が始まるうとしていた。

→ヨセフは、エルサレムの北西約 32 km のところにある小村アリマタヤの出身で、裕福だったので、イエスの遺体を適切に埋葬する経済的なゆとりがあった(マタイ 27:57)。恐らく、ピラトと番兵たちにいくらかの金銭を支払ったのだろう。



【参考】聖書に登場する「アリマタヤ出身のヨセフ」

		聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 3 / 聖句等の総数 33250]	
S	マタイによる福音書 27:57 <u>夕方になると、アリマタヤ出身の金持ちでヨセフという人が来た。この人もイエスの弟子であった。</u>	
S	マルコによる福音書 15:43 アリマタヤ出身で身分の高い議員ヨセフが来て、勇気を出してピラトのところへ行き、イエスの遺体を渡してくれるようにと願い出た。この人も神の国を待ち望んでいたのである。	
S	ヨハネによる福音書 19:38 その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、イエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。	

39 そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香（口語訳：沈香、回復訳、新改訳、聖書協会共同訳：アロエ、NIV/NKJV：aloes）を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。
→ニコデモは最高法院に属する議員で、イエスを殺そうと企てた（ヨハネ 11：46～47）ファリサイ派の教師でもあった。

→没薬：ミルラ myrrh ともいい、カンラン科（APG 分類：カンラン科）コミフォラ属の樹木から採れるゴム樹脂を集めたもの。薫香料、防腐剤に用いられた。

→沈香（じんこう）：香料の一種。沈丁花（じんちょうげ）科の熱帯産高木材を土中に埋め、腐らせて作る。この優良品を伽羅（きゃら）と呼んでいる。

→百リトラ：1リトラ（≒326g）×100リトラ≒32.6 kg



【参考】聖書に登場する「ニコデモ」

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 5 / 聖句等の総数 33250]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳)
S ヨハネによる福音書	3:1 さて、ファリサイ派に属する、ニコデモという人がいた。ユダヤ人たちの議員であった。	
S ヨハネによる福音書	3:4 ニコデモは言った。「年をとった者が、どうして生まれることができますでしょう。もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか。」	
S ヨハネによる福音書	3:9 するとニコデモは、「どうして、そんなことがありえましょうか」と言った。	
S ヨハネによる福音書	7:50 彼らの中の一人で、以前イエスを訪ねたことのあるニコデモが言った。	
S ヨハネによる福音書	19:39 そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。	

40 彼らはイエスの遺体を受け取り、ユダヤ人の埋葬の習慣に従い、香料を添えて（数枚の）亜麻布（→ NIV/NKJV: in strips of linen）で包んだ。

→遺体は通常、亜麻（Linum アマ科の一年草）布 linen で包まれた。

芳しい香料や軟膏も塗られた。

亜麻布などのリネン素材は、肌にやさしく、サラッとして、爽やかな涼感がある。汚れも落ちやすく、洗濯にも強い素材で、繰り返し洗うごとに柔らかさはいっそう増し、白いものはさらに白くなる特性がある。



41 イエスが十字架につけられた所には（墓がある）園があり、そこには、（ヨセフが自分のために岩を掘った、）だれもまだ葬られたことのない新しい墓があった。

→この園は、ゴルゴタ付近にある墓地ではない園で、ヨセフが自分のために岩を掘った墓がある（マタイ 27：59～60）。

→マタイによる福音書 27：59～61

ヨセフはイエスの遺体を受け取ると、きれいな亜麻布に包み、岩に掘った自分の新しい墓の中に納め、墓の入り口には大きな石を転がしておいて立ち去った。

マグダラのマリアともう一人のマリアとはそこに残り、墓の方を向いて座っていた。

→ルカによる福音書 23：55～56

イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、家に帰って、香料と香油を準備した。

→香料と香油：没薬や沈香（ヨハネ 19：39）これらはパレスチナでは産出できないので、高価な物だった。

→当時、ユダヤ人は固い岩を切り開いた横穴に遺体を埋葬した。
 これらの墓には1 m四方の四角い入口があった。墓の外側には溝が掘られ、石臼のような大きな丸い石が入口を塞ぐために置かれた。



42 その日はユダヤ人の準備の日（→31 節、安息日の前日の金曜日）であり（時間もなく）、この墓が近かったので、そこにイエスを納めた。

【参考】 聖書にある「清めの儀式」

タイトル(書名)	章:節 聖句 [検索対象総数: 10 / 聖句等の総数 33250 (清めの儀式)10個]	聖書Navi Active 393128091 (新共同訳) [検索語彙: 清めの儀式]
K レビ記	14:4 祭司は清めの儀式をするため、その人に命じて、生きている清い鳥二羽と、杉の枝、緋糸、ヒソブの枝を用意させる。	
K レビ記	14:7 清めの儀式を受ける者に七度振りかけて清める。その後、この生きている鳥は野に放つ。	
K レビ記	14:8 清めの儀式を受けた者は、衣服を水洗いし、体の毛を全部そって身を洗うと、清くなる。この後、彼は宿営に戻ることができる。しかし、七日間は自分の天幕の外にいななければならない。	
K レビ記	14:11 清めの儀式を執行する祭司は、その儀式にあずかる者にこれらの献げ物を持たせ、臨在の幕屋の入り口の主の御前に立たせる。	
K レビ記	14:14 祭司はこの献げ物の雄羊の血を取って、清めの儀式を受ける者の右の耳たぶ、右手の親指、右足の親指に塗る。	
K レビ記	14:17 次に、手のひらに残ったオリーブ油の一部を、清めの儀式を受ける者の右の耳たぶ、右手の親指、右足の親指に塗り、更に賠償の献げ物の血の上にも塗る。	
K レビ記	14:18 再び手のひらに残ったオリーブ油は清めの儀式を受ける者の頭に塗る。祭司はこうにして、彼のために主の御前に贖いの儀式を行う。	
K レビ記	14:25 次に、賠償の献げ物の雄羊を屠り、その血を取って清めの儀式を受ける者の右の耳たぶ、右手の親指、右足の親指に塗る。	
K レビ記	14:28 次に、手のひらのオリーブ油を、清めの儀式を受ける者の右の耳たぶ、右手の親指、右足の親指に塗り、更に賠償の献げ物の血の上にも塗る。	
K レビ記	14:29 手のひらに残ったオリーブ油は清めの儀式を受ける者の頭に塗って、主の御前で彼のために贖いの儀式を行う。	